たかさご史話 30

～三菱製紙高砂工場見学記～

去る二月九日、私たちは三菱製紙高砂工場をたずね、同社の方の案内で施設を見学した。当然ながら製紙の工程も機械化・高速化がすすみ、一九〇一（明治三四）年の工場設立時や戦前・戦中期とは、様子が一変している観があった。

それでも設立時以来というレンガづくりの建物が数棟、今日でも現役でもちいられていた。本体は更新されているが、唐草ふうの装飾がほどこされた台座は、大正期を思わせるような抄紙機もあった。高砂の近代化を象徴する工場だけに、歴史を感じさせる個所が少なくない。

かつては社員の福利施設だったという三菱魚町倶楽部に案内していただくと、そこはシャレた立派な洋館だった。高砂の歴史文化財として、保存されるべき建物のひとつといっても過言ではあるまい。

館内には高砂工場の古写真や若干の博物資料が展示されてあった。そのなかで目を引いたのは、工場排水路をめぐる隣村の反発が「遂ニ一場ノ騒擾ニ及」んだことにふれた、社長の手になる一九〇一年八月二八日づけ書簡である。

近代地域史における企業の重要性はいうまでもないが、従来の自治体史がその点を史料にそくして解明してきたとは評しがたい。さいわい高砂市史の編さんにあたっては、史料提供をふくめ三菱製紙の親切な協力をえることができた。ユニークな市史をつくれるのではないか、そんな期待のふくらむような一日だった。

（高砂市史編さん専門委員　三輪　泰史）